第十七講　身体論・芸術論

異なる世界の要素を意図してとり入れてきたといわれるバレエにも、アフリカのダンスの要素はほとんど関与しなかったようだ。ここでいう「アフリカ」は、ベルベル＝アラブの文化を基層に地中海世界の一部をなしている北アフリカを除く、サハラ以南のいわゆる「黒人アフリカ」である。

バレエにアフリカのダンスが関わらなかったのは、何よりもアフリカの人々にとっての踊る行為が、「おどる」というコンセプトにおいても、パフォーマンスとしての身体の使い方においても、バレエとはあまりに異質だったからであろう。見方を変えれば、アフリカのダンスのバレエにとっての異質性をとりあげてみることで、バレエというものが外部世界の要素を摂取しながらも保ちつづけてきた、［Ａ］の特徴を問い直してみることも可能になるといえるかもしれない。

アフリカにおけるダンスは、アフリカの人々がヨーロッパの植民地支配から独立した、国によって違いはあるがほぼ一九六〇年代から、主として欧米での劇場公演を目的としていくつかの国で政府主導で編成された民族歌舞団を除けば、劇場空間で観賞のために集まった観衆を前に踊られるものは、ほとんどなかったといってよい。だがそれは、アフリカ社会に踊ることへの愛好が稀薄だったということを意味しない。逆に、踊ることが日常生活に浸透し、甲すべての人がダンサーだったともいえるために、観賞する興行としての踊りが成立しにくかったとみることもできる。

セネガルの元大統領で詩人で、「ネグリチュード」（黒人性）の思想の提唱者でもあるレオポルド・サンゴールは、かつてアフリカの黒人の特質を、デカルトの「われ思う、ゆえにわれあり」（Je pense, donc je suis.）をもじった「われ踊る、ゆえにわれあり」（Je danse, donc je suis.）ということばで表現したことがある。これは、踊ることが生きることと不可分のアフリカの人たちの実存をよく表わしている。

実際、アフリカの村の生活でも町の生活でも、たとえば夕暮どき中庭の石の上に置いたトランジスターラジオから、ちょっとでも「踊れる」音楽が聞こえてこようものなら、よちよち歩きの幼児でもリズミカルに腰や肩を動かしはじめるし、夕餉（ゆうげ）の支度をしていた「お婆さん」と呼んでもいい女性も、鍋の汁をかきまわしていた乙杓子を手に持ったまま、おどけた身ぶり腰ぶりで

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

踊りだす。それは踊らずにいられない、身体に内蔵された衝動――日常踊ることがまずないといっていいヤマト民族の一人である私の目には、ほとんど遺伝子にセットされているとしか思えない衝動の［B］なのである。しかもそれが、見ていても楽しくなる、上手な踊りなのだ。

　私が三十年来アフリカで最も親しくつきあってきたサバンナの農民モシ族（現ブルキナファソ）には、「音楽」に当たる概念がなく、メッセージとして意味のある音とそうでない雑音、現代の情報科学でいうシグナルとノイズに対応する概念があるだけなのだが、メッセージとして意味があるかどうかの基準には、その音が聞く人を踊らせる力があるかどうかも含まれている。モシの人たちにとって、音がメッセージを伝達するということのうちには、知性や感性に対してだけでなく、踊りださずにいられなくなるような、身体への働きかけも、重要な一部としてあるのだ。

　つまりアフリカの人たちにとって、ダンスは観るものである前に自分で踊るものであり、身体で表現するよりは、身体を通じて自分が何かを感じとり、享受する行為であるように思える。醒めた個を、集合性ないしは共同性のなかに埋没させること、「時」を止めて空間として展開するかわりに、「時」のなかに身を投じて純粋に「時」をからだごと生きること。死者をとぶらう祭りで、夜っぴて砂ぼこりを蹴立てながら全身で踊りつづける人たちを見ていて、私はこの人たちが文字（エクリチュール）を必要としなかった理由がわかったような気がした。ある種の踊りは、時を止め観念を外在化し固定するという文字をしるす行為の、対極にある行為ではないかと私は思うのだが、アフリカの踊りからみると、バレエなどはエクリチュールの延長にむしろ位置づけられるといっていい。

問１　空欄［A］に入る最も適当なものを次の中から一つ選べ。

①　地域文化としての歴史性
②　劇場芸術としての歴史性
③　身体表現としてのアイデンティティ
④　民族文化としてのアイデンティティ

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

問２　傍線部甲の「すべての人がダンサー」とは、ここではどのような事態をいっているのか。その説明として最も適当なものを次の中から一つ選べ。

①　踊りを何らかの生活の糧にして皆が暮らしている。
②　皆が生まれながらに踊りの才能を身に付けている。
③　日常の生活の場や環境が劇場空間にもなっている。
④　皆が踊っているので観衆というものが存在しない。

問３　波線部乙に関して、「（　）も杓子も」という慣用句があるが、（　）と同じ動物の名前が入るもので最も適当なものを次の中から一つ選べ。

①　（　）も食わない　②　（　）を被る　③　（　）の一声　④　（　）の歩み

問４　空欄 B には漢字二字の熟語が入る。その組み合わせる漢字二つを次の中から選べ。

①　幻　②　想　③　見　④　発　⑤　現　⑥　影

問５　本文が述べている内容と合致するものが次の中に二つある。それはどれとどれか。

①　バレエは身体文化だと思っているが、アフリカのダンスと比べるとむしろ文字文化の範疇（はんちゅう）に入ってしまう。
②　バレエのような劇場芸術は、見るものと演じるものという二項対立的な世界に人々をふり分けてしまう。
③　文字という記録し表現するための固定した記号など必要としない行為は、欧米社会では理解されがたい。
④　踊るという行為が、生きることと密接不可分な社会は、欧米的な身体文化の枠組みには収まらないものがある。
⑤　文字を必要としない社会の人々の方が、文字文化の社会の人間よりも優れた身体文化を営んでいる。
⑥　踊りが相互のコミュニケーション言語となっているアフリカのある社会では、文字など必要としない。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

第十七講　知識モノ解説

文学史・人物解説

●川田順造＝かわだじゅんぞう（一九三四〜）→今回の文章（『アフリカの声　歴史への問い直し』）の執筆者。
文化人類学者でレヴィ・ストロースとも親交があった。
研究対象の西アフリカ、モシ族に関する文章は慶應大学文学部の小論文入試でも出題された。

語句

実存＝じつぞん→現実存在・「人間とは〜」といった類的な大きなくくり、抽象的概念的なまとめではなく、個々に呼吸していきているリアルな人間像
夜っぴて→一晩中・夜もすがら
猫も杓子も→誰もかれも、みんな
cf 杓子定規＝しゃくしじょうぎ→決まりきった、融通がきかない
犬も食わない→ひどく毛嫌いする
鶴の一声→有力者の一言で決定すること
牛の歩み→ひどくゆっくりなこと
アイデンティティ→他者から認証された個性

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

復習問題　第十七講

次の傍線部にあたる漢字を、次の各選択肢から選びなさい。

（ア）アラブの文化をキソウとする　①基　②機　③帰　④来　⑤着

（イ）バレエの劇場コウエンが始まる　①講　②公　③巧　④広　⑤後

（ウ）政府シュドウで組織される　①守　②首　③主　④手　⑤衆

（エ）ある思想のテイショウ者に会う　①証　②唱　③賞　④称　⑤昭

（オ）音楽団をヘンセイする　①編　②偏　③変　④遍　⑤片

（カ）全身で喜びをキョウジュする　①教　②共　③享　④興　⑤経

（キ）身体にナイゾウされた衝動　①臓　②蔵　③像　④象　⑤造

（ク）思考やカンネンを表現する　①感　②勘　③官　④観　⑤歓

（ケ）内なるものをガイザイ化する　①概　②慨　③害　④外　⑤蓋

（コ）ジュンスイに体ごと生きる　①殉　②準　③潤　④順　⑤純

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

第十七講　身体論・芸術論

《本文の対比構造》

主役

サハラ以南の黒人アフリカのダンス＝踊ることが日常生活に浸透・観賞用の踊りではない・踊ることと生きることが一体

主な対比

比較相手

ヨーロッパのバレエ＝劇場空間で観賞のために踊られるもの・文字文化に近い

小さな対比

脇役

政府主導の民族歌舞団＝劇場公演を目的

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

《解説》

問１《キーワードに関する空欄補充・選択肢》

今回の比較相手であるヨーロッパのバレエの特徴を問うています。観賞用であることこそアフリカのダンスとの相違点ですから②が正解。①は「地域文化」が×。バレエは「異なる世界の要素を意図してとり入れてきた」とありますから、地域特性の差を比べているわけではありません。したがって、記述に反するといっても、正しい対比喪失の誤りといってもよいでしょう。③の「身体表現」では、バレエもアフリカのダンスも、政府主導の民族歌舞団もすべてあてはまり、バレエの特徴とはいえません。④の「民族」との表現は、政府主導の民族歌舞団についてのみ使われており、対比混乱の誤りです。

問２《傍線部説明・選択肢》

この傍線部も後述の「ほとんど遺伝子にセット」も、これらは比喩表現です。本当にＤＮＡレベルで「ダンス遺伝子」を持っているという話ではありませんから注意。見る専門の観衆がいないということで④が正解です。②はその比喩を文字通りに解釈した誤りです。①の「生活の糧」、③の「劇場空間」では「観賞用」になってしまいます。対比混乱の誤りです。とくに③は、まるでオープンルームでショーをしながら住んでいるかのようです。

問３《語句知識の空欄補充・選択肢》

「猫も杓子も」は「誰でもみんな」を意味する慣用句です。①の「犬も食わない」はひどく毛嫌いするという意味。②の「猫を被る」が正解で、大人しく見せかけるという意味。③の「鶴の一声」は、有力者の意見で決定するという意味。④の「牛の歩み」は、非常にゆっくりなこと。

問４《語句知識の空欄補充・選択肢》

「身体に内蔵された衝動」が表に出ることですから「発現」です。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

問５《主題理解・選択肢》

バレエは「文字の延長」と書かれていますから①は正しいです。②は、バレエが「劇場芸術」であることはその通りで、「見るものと演じるもの」がいることも事実です。しかし、そのような「二項対立的な世界に人々をふり分けて」が×です。バレエ自体の特徴であって、「人々を（アフリカの人々も含めて）」巻き込むものではありません。記述に反する誤りです。③は「欧米社会では理解されがたい」が×です。本文は、文字をもたない文化と文字をもつ文化との比較をしているだけです。一方が他方から理解されないなどいう考察は本文の記述に反するものです。④は正しい対比ですね。正解です。⑤は優劣を入れてしまった典型的な不当な価値判断です。⑥は「踊りが相互のコミュニケーション言語となっている」が×です。文字がないのは事実ですが、しゃべり言葉はあるはずです。これではまるで、「おはよう」の挨拶をダンスで表現し、「ご飯できたよー」もダンス、「いただきます」もダンス、みんな黙々と踊り続けながら意思疎通するかのようです。ヘトヘトだよ！

模範解答

問１＝②　問２＝④　問３＝②　問４＝④⑤　問５＝①④（順不同）

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

復習問題解答　第十七講

（ア）①　（イ）②　（ウ）③　（エ）②　（オ）①
（カ）③　（キ）②　（ク）④　（ケ）④　（コ）⑤

解答漢字一覧

（ア）基層　（イ）公演　（ウ）主導　（エ）提唱　（オ）編成
（カ）享受　（キ）内蔵　（ク）観念　（ケ）外在　（コ）純粋

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。